

幼児の生活アンケート

—— 乳幼児をもつ保護者を対象に ——



目次

調査概要 …… 2
基本属性 …… 3

1. 幼児の生活

- ① 起床時刻、就寝時刻 …… 4
- ② 家を出る時刻、家に帰る時刻 …… 5
- ③ よくする遊び、遊び相手 …… 6
- ④ 親子で一緒にすること …… 7
- ⑤ ひとりでできること …… 8
- ⑥ メディアの視聴・使用頻度 …… 9
- ⑦ 習い事 …… 10

2. 母親の意識

- ① 子育て意識 …… 11
- ② 子育て観 …… 12
- ③ しつけや教育の情報源 …… 13
- ④ 園を選ぶポイント …… 14
- ⑤ 園への要望、進学期待 …… 15
- ⑥ 教育費、園にかかる費用 …… 16

3. 子育てサポート

- ① 子どもの面倒を見てくれる人 …… 17
- ② 夫婦の家事・子育て分担 …… 18
- 調査からみえてきたこと …… 19

調査概要

調査テーマ

乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態

調査方法

郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

調査時期

第1回調査 1995年2月
 第2回調査 2000年2月
 第3回調査 2005年3月
 第4回調査 2010年3月
 第5回調査 2015年2～3月

調査対象

第1回調査(95年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者1,692名(配布数3,020通、回収率56.0%)

第2回調査(00年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)、および地方都市(富山市、大分市)の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者3,270名(配布数5,600通、回収率58.4%)

*経年での比較を行うために、地方都市の回答を分析から除外している。

第3回調査(05年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者2,980名(配布数7,200通、回収率41.4%)

第4回調査(10年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者3,522名(配布数7,801通、回収率45.1%)

第5回調査(15年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者4,034名(配布数11,384通、回収率35.4%)

調査項目

子どもの基本的な生活時間／習い事／メディアとのかかわり／遊び／母親の教育観・子育て観／子どもの将来への期待／今、子育てで力を入れていること／母親の子育て意識／夫婦の家事・子育て分担／子育て支援など

*調査項目は経年比較が可能なように配慮したが、時代の変化に合わせて、追加・削除などの変更を行っている。

分析枠組みとサンプル数

本速報版での分析対象は、1歳6か月以上

経年調査	調査年	性別	年齢	1歳児						分析対象 サンプル数			
				0歳児 ※1	月齢不明	1歳前半 ※2	1歳後半 ※3	2歳児	3歳児		4歳児	5歳児	6歳児
第1回	95年	男		—	—	—	57	226	154	182	110	90	1,692
		女		—	—	—	71	233	152	206	108	103	
第2回	00年	男		—	—	—	91	246	123	128	125	130	1,601
		女		—	—	—	84	235	128	98	105	108	
第3回	05年	男		161	12	170	152	374	164	162	152	143	2,297
		女		165	11	164	151	366	176	150	174	133	
第4回	10年	男		150	—	132	143	245	271	291	243	264	2,918
		女		172	—	150	127	247	276	288	265	258	
第5回	15年	男		143	—	146	172	263	290	303	334	356	3,466
		女		130	—	149	147	320	336	307	337	301	

※1：0歳6か月～0歳11か月 ※2：1歳0か月～1歳5か月 ※3：1歳6か月～1歳11か月

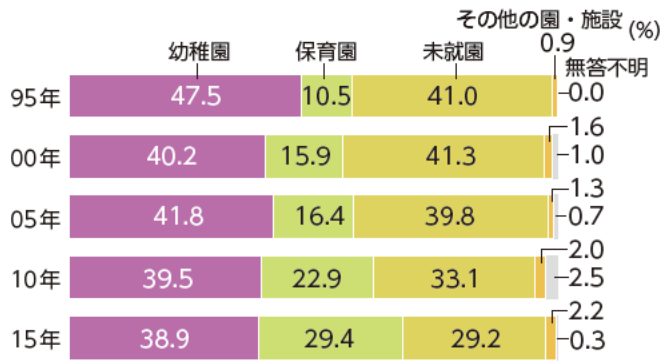
◆本速報版では、1歳6か月以上の幼児をもつ保護者の回答のみを分析している。

◆データの精度を高め、経年での比較を可能にするため、比推定を用い、調査対象の属性別構成比を現実に合わせて。比推定で用いるウェイトは、子どもの性別(2区分)×子どもの年齢別(6区分)の12区分に分割して、4都県の人口推計に基づいて作成した。本速報版の百分率(%)は、このウェイトをつけて算出されている。なお、グラフ内の()にあるサンプル数はウェイトをつける前の数を示している。

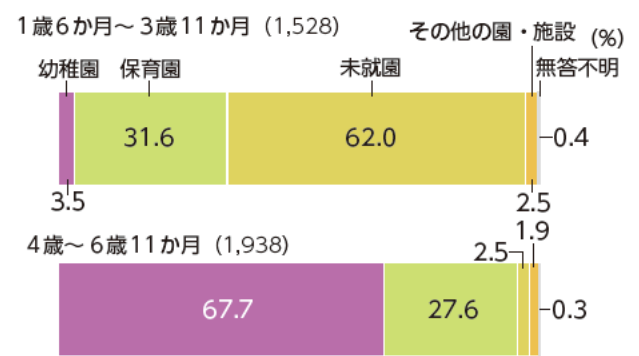
※調査全体の詳細な分析は、ベネッセ教育総合研究所のホームページ(<http://berd.benesse.jp/>)にて、「第5回 幼児の生活アンケートレポート」(2016年)として報告予定。

基本属性

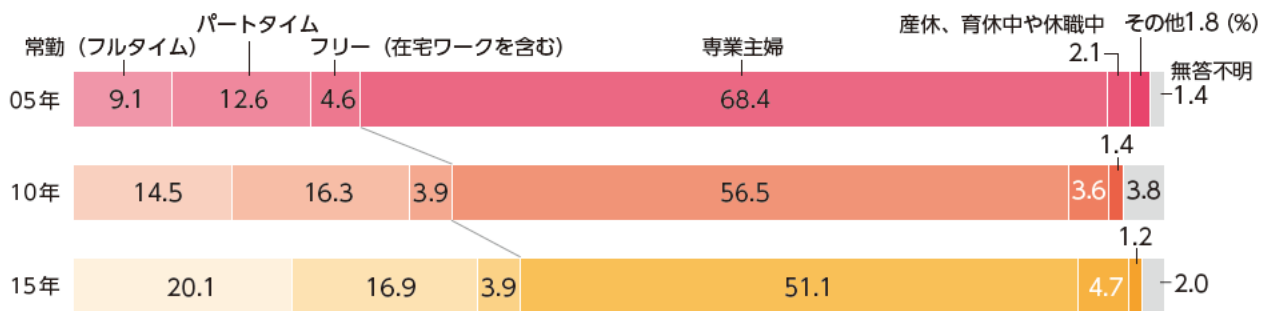
●子どもの就園状況(経年比較)



(子どもの年齢区分別 15年)

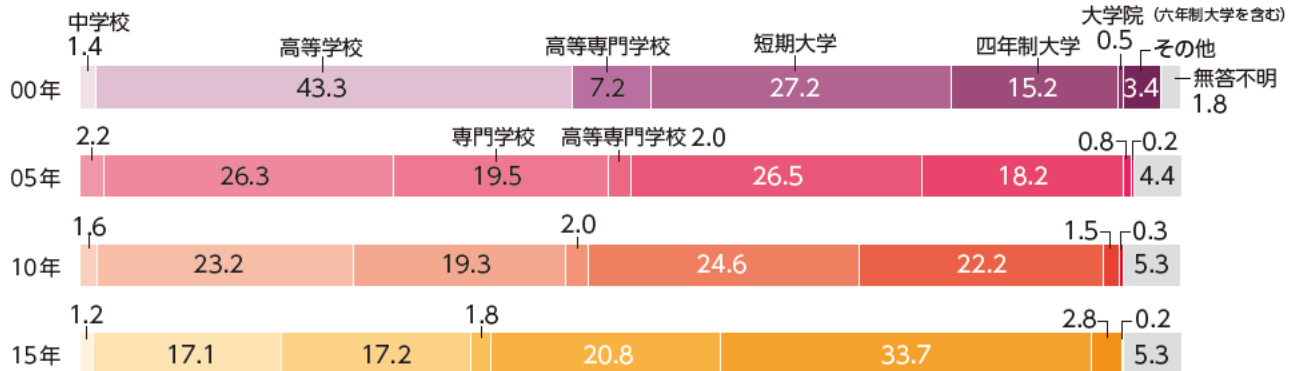


●母親の就業状況(経年比較)



※母親がいない人は、分析から除外している。

●母親の最終学歴(経年比較)



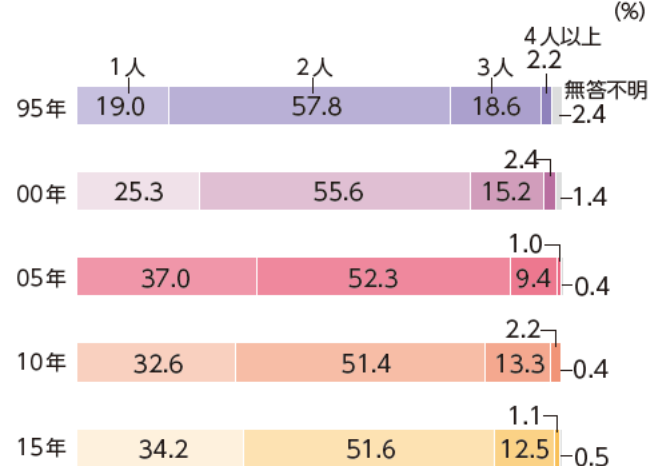
※「専門学校」は00年調査では、たずねていない。

●平均年齢(経年比較)

父親		母親	
00年	36.4歳	00年	33.8歳
05年	36.2歳	05年	33.9歳
10年	36.9歳	10年	35.0歳
15年	38.5歳	15年	36.5歳

※無答不明の人は、分析から除外している。

●子どものきょうだい数(経年比較)



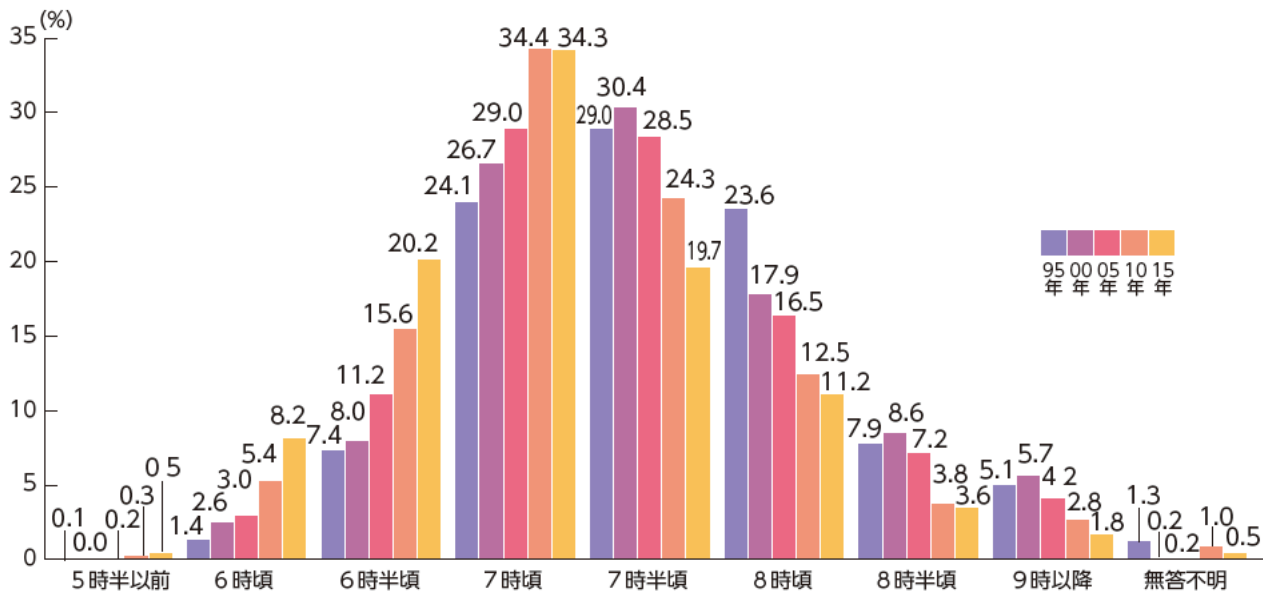
※この調査の対象となる「お子様も含めて」たずねた。
 ※「4人」「5人以上」を「4人以上」としている。

早寝早起きの傾向がますます強まった

起床時刻は、20年間でさらに早まり、6時半頃以前の比率が20ポイント増加した(95年8.9%→15年28.9%)。

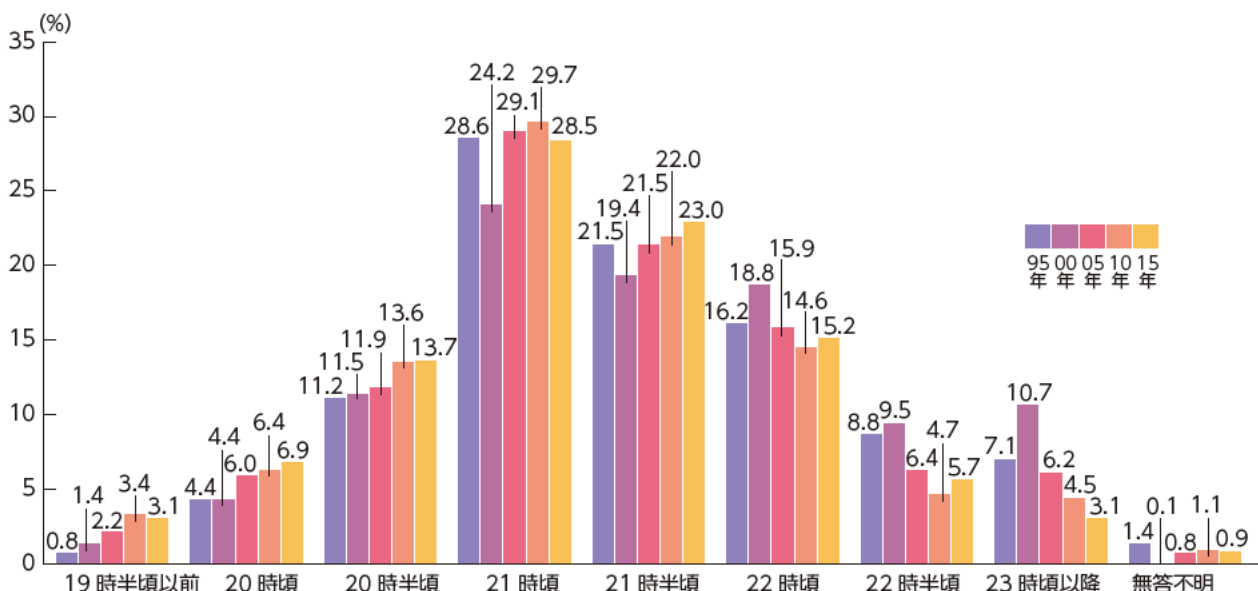
Q お子様は平日、何時頃に起きますか。

図1-1-1 平日の起床時刻(経年比較)



Q 夜、何時頃に寝ますか。

図1-1-2 平日の就寝時刻(経年比較)



※「19時以前」「19時半頃」を「19時半頃以前」に、「23時頃」「23時半以降」を「23時半以降」としている。

起床時刻は、20年間でさらに早まっている(図1-1-1)。6時半頃以前に起きる比率は、20ポイント増加した(95年8.9%→00年10.6%→05年14.4%→10年21.3%→15年28.9%)。グラフには示していないが、保育園児の起床時刻が早くなっている。朝食時間も同様に早まっている。就寝時刻は、約半数が

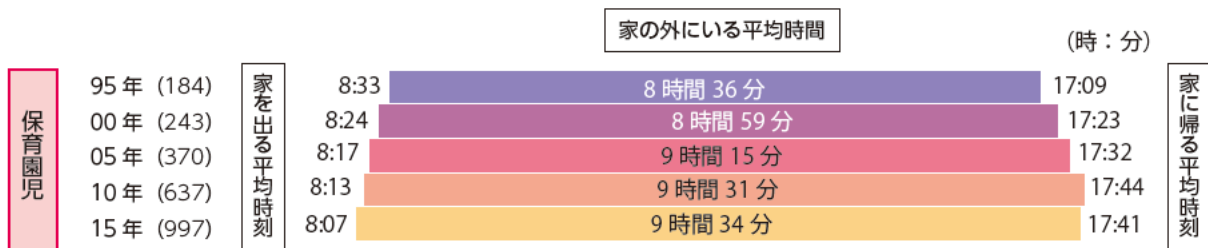
21時台に就寝している(図1-1-2)。20年前に比べて、22時頃以降に就寝する比率がやや減少しており、早寝の傾向がうかがえる(95年32.1%→00年39.0%→05年28.5%→10年23.8%→15年24.0%)。

幼稚園児も保育園児も、家を出る時間が早くなっている

20年間で、幼稚園児・保育園児ともに、園に向けて家を出る時刻が早くなり、家の外にいる平均時間が長くなっている。平日に園で過ごす平均時間は、保育園児の約7割が8時間～10時間くらい、幼稚園児の約8割が5時間～6時間くらいであった。

Q 幼稚園・保育園に行くために何時頃、家を出ますか。／幼稚園・保育園から何時頃、帰宅しますか。

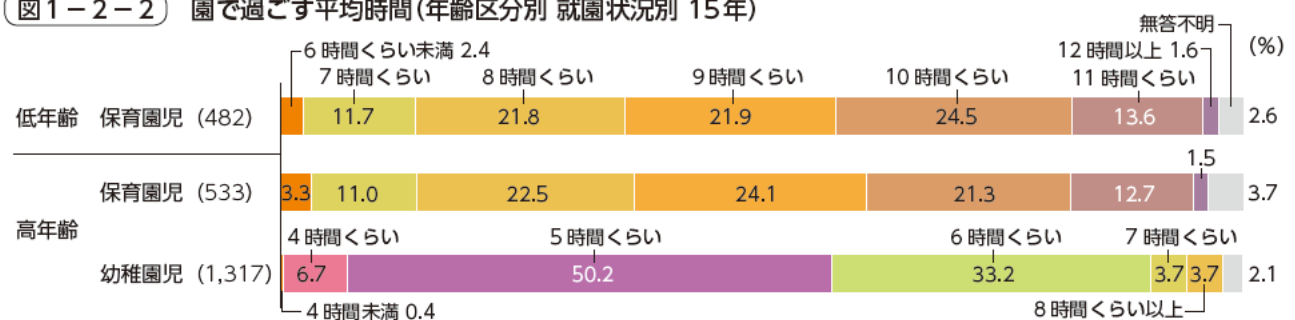
図1-2-1 家を出る・家に帰る平均時刻と家の外にいる平均時間(就園状況別 経年比較)



※ 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 ※ 家を出る時刻、家に帰る時刻のいずれかの質問に対して無答不明のあった人は、分析から除外している。
 ※ 95年調査は、「18時以降」を18時30分、00年調査以降は、「18時頃」を18時、「18時半頃」を18時30分、「19時以降」を19時と置き換えて算出した。
 ※ 「家の外にいる平均時間」は、「家を出る平均時刻」と「家に帰る平均時刻」から算出した。

Q 1日のうち、どれくらいの時間を幼稚園・保育園で過ごしますか。平日の平均時間を教えてください。

図1-2-2 園で過ごす平均時間(年齢区分別 就園状況別 15年)



※ 子どもを園に通わせている人のみ回答。
 ※ 調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。
 低年齢は、1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢は、4歳～6歳11か月の幼児。
 ※ 保育園児について「4時間未満」から「6時間くらい」を「6時間くらい未満」に、幼稚園児について「8時間くらい」から「12時間以上」を「8時間くらい以上」としている。

20年間で、園に向けて家を出る平均時刻は、幼稚園児は10分、保育園児は26分早くなった(図1-2-1)。家に帰る平均時刻は、幼稚園児は22分、保育園児は32分遅くなった。その結果、家の外にいる平均時間は、幼稚園児は32分長くなり6時間11分に、保育園児は58分長くなり、9時間34分になった。就労する母親

の増加を背景に、園で預かり保育や延長保育が増加していることも一因だろう。園で過ごす時間は、保育園児では「8時間くらい」から「10時間くらい」が約7割を占め、幼稚園児では「5時間くらい」(50.2%)と「6時間くらい」(33.2%)が約8割を占める(図1-2-2)。



平日一緒に遊ぶ相手は、「母親」が増加して、「友だち」が減少

平日、幼稚園・保育園以外で遊ぶ相手として、「母親」が20年間で約30ポイント増加。一方、「友だち」は約30ポイント減少している。よくする遊びでは、公園の遊具やつみ木・ブロック、おもちゃ遊びなど、さまざまな遊びが増加している。

Q お子様はどのような遊びをよくしていますか。

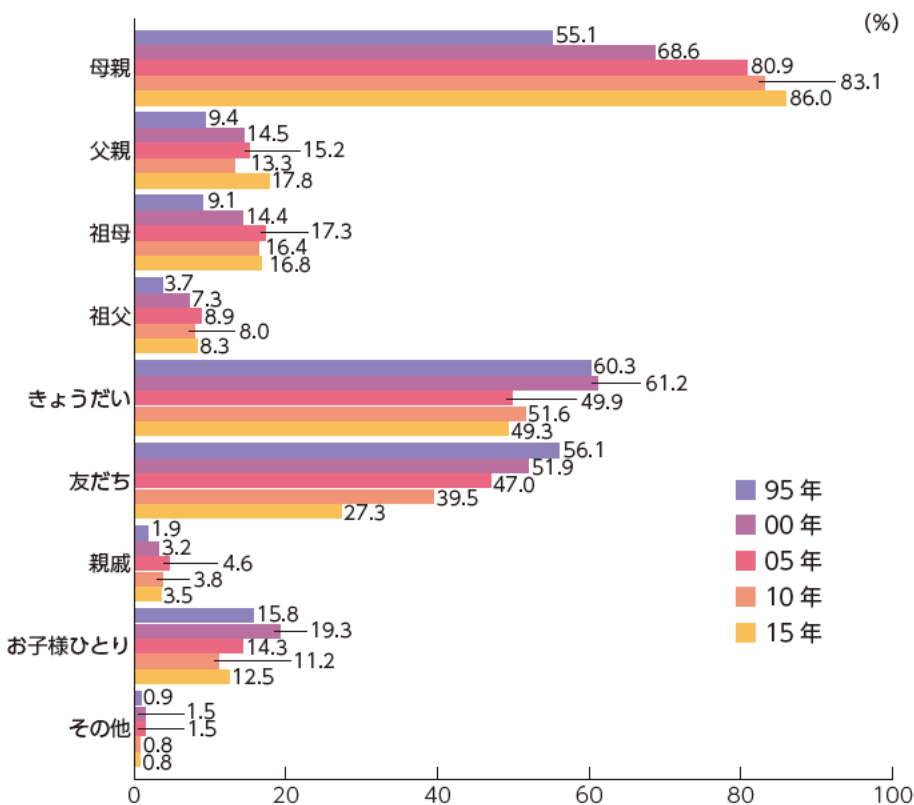
図1-3-1 よくする遊び(経年比較)

	95年	00年	05年	10年	15年
公園の遊具(すべり台、ブランコなど)を使った遊び	66.0	68.4	76.1	78.1	80.0
つみ木、ブロック	55.0	55.5	63.1	68.0	68.4
人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び	51.2	53.5	56.9	56.6	60.5
絵やマンガを描く	45.0	43.6	57.5	53.5	50.4
ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び	39.5	43.8	45.5	46.1	49.8
砂場などでのどろんこ遊び	49.5	52.0	57.6	53.6	47.7
ボールを使った遊び(サッカーや野球など)	35.0	33.2	46.8	46.9	46.2
自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び	46.3	51.5	53.9	49.5	45.7
マンガや本(絵本)を読む	30.4	28.1	44.9	44.5	43.8
石ころや木の枝など自然のものを使った遊び	26.2	33.8	37.6	40.2	40.3
ジグソーパズル	21.9	17.9	28.8	32.9	33.0
おにごっこ、缶けりなどの遊び	13.9	13.6	20.9	23.0	27.7
カードゲームやトランプなどを使った遊び	19.4	17.8	26.2	25.6	27.7
なわとび、ゴムとび	14.1	12.6	19.3	21.1	20.5
*携帯ゲーム				17.8	18.1
テレビゲーム	24.2	20.2	15.1	17.0	10.5
その他	7.2	9.2	13.2	10.1	9.6

※複数回答。※[*]は10年調査、15年調査のみの項目。※項目は15年調査結果の降順に図示。

Q 平日、(幼稚園・保育園以外で)遊ぶときは誰と一緒に遊ぶことが多いですか。

図1-3-2 平日、(幼稚園・保育園以外で)一緒に遊ぶ人(経年比較)



※複数回答。

(%) 「よくする遊び」について、20年前よりも増加しているのは、「公園の遊具(すべり台、ブランコなど)を使った遊び」、「つみ木、ブロック」、「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」などをはじめとした多くの項目であった(図1-3-1)。一方、95年調査から05年調査にかけて増加したが、その後は減少傾向にあるのは「自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び」、「砂場などでのどろんこ遊び」である。一緒に遊ぶ人では、20年間で母親が30.9ポイント増加し、友だちが28.8ポイント減少、きょうだいが11.0ポイント減少している(図1-3-2)。



ほとんど毎日、「家族みんなで食事をする」家庭は約半数

「ほとんど毎日」していることは、「子どもと一緒に話をする」、「子どもとお風呂に入る」が約9～10割、「子どもと一緒に遊ぶ」、「子どもとテレビやDVDを見る」が6割台、「家族みんなで食事をする」は約5割である。

Q あなたのご家庭では、お子様と次のようなことをどれくらいしますか。

図1-4-1 子どもと一緒にすること(15年)

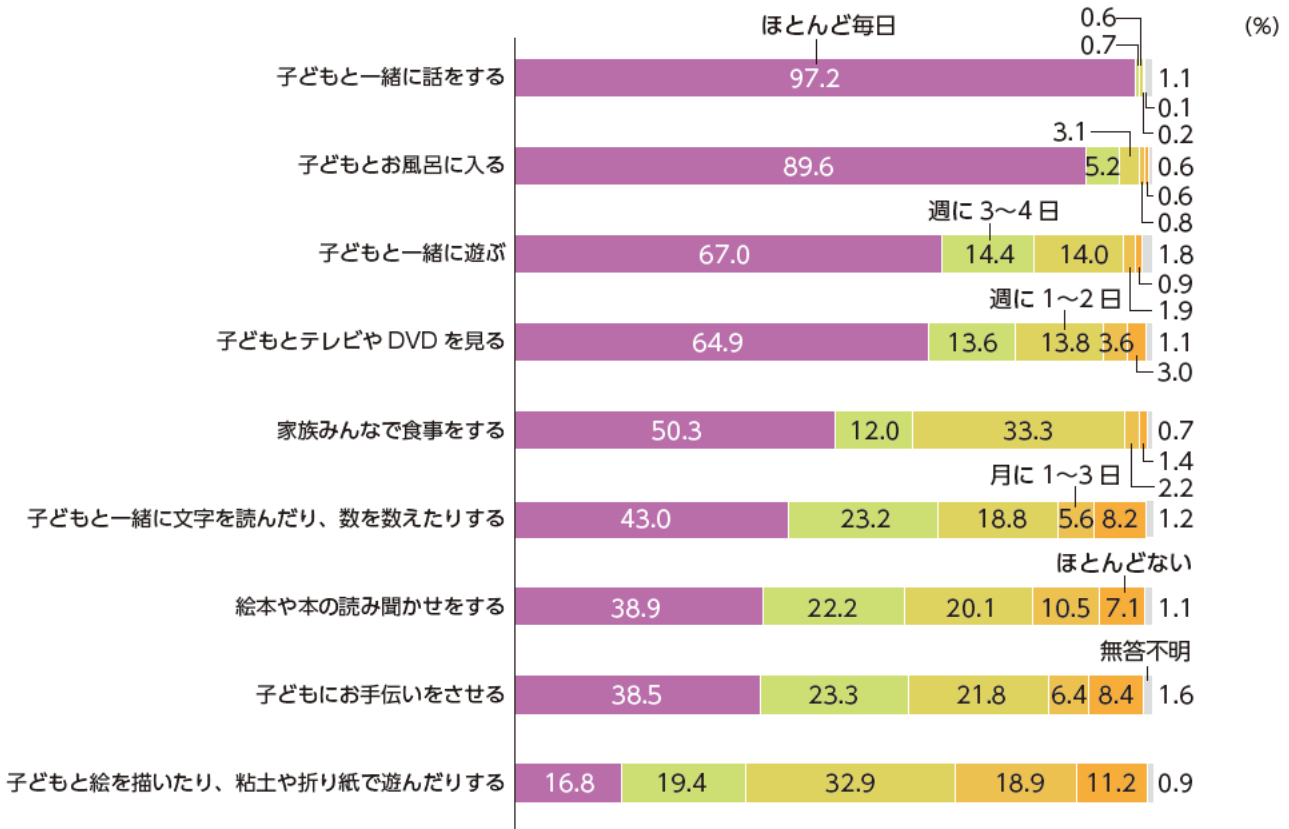


図1-4-2 子どもと一緒にすること(年齢区分別 就園状況別 15年)

	低年齢		高年齢	
	未就園児 (948)	保育園児 (482)	幼稚園児 (1,317)	保育園児 (533)
子どもと一緒に話をする	97.9	98.3	97.9	98.1
子どもとお風呂に入る	97.1	97.5	92.5	94.5
子どもと一緒に遊ぶ	95.3	> 85.3	76.3	> 63.6
子どもとテレビやDVDを見る	87.7	> 78.6	74.1	70.9
家族みんなで食事をする	59.6	64.2	61.6	< 66.9
子どもと一緒に文字を読んだり、数を数えたりする	71.5	> 63.7	65.0	> 58.1
絵本や本の読み聞かせをする	76.4	> 70.1	51.5	47.4
子どもにお手伝いをさせる	64.9	> 54.0	64.3	> 56.0
子どもと絵を描いたり、粘土や折り紙で遊んだりする	53.4	> 28.4	31.8	> 18.5

※<>は年齢区分・就園状況別にみたときに、5ポイント以上の差がみられた項目。

※「ほとんど毎日+週に3～4日」の%。※低年齢は、1歳6か月から3歳11か月の幼児。高年齢は、4歳～6歳11か月の幼児。

家庭で子どもとしていることをたずねた(図1-4-1)。「子どもと一緒に遊ぶ」、「子どもとテレビやDVDを見る」頻度は、週に3日以上で約8割を占める。「家族みんなで食事をする」、「子どもと一緒に文字を読んだり、数を数えたりする」では、約6割が週に3日以上行っ

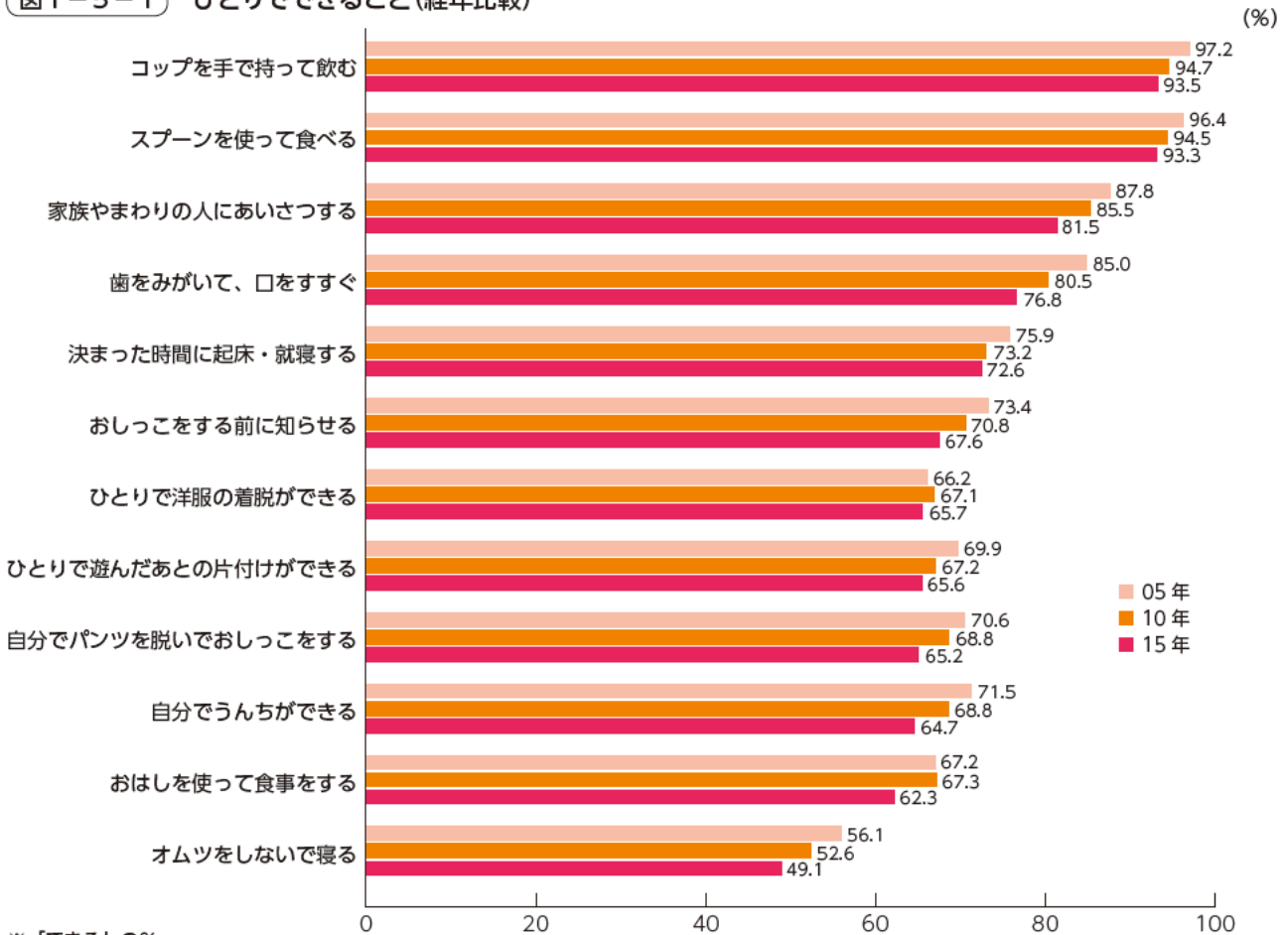
ている。保育園児の家庭で比率が高いのは、「家族みんなで食事をする」であり、幼稚園児と未就園児で多いのは、「子どもと一緒に遊ぶ」、「子どもと一緒に文字を読んだり、数を数えたりする」などである(図1-4-2)。

低年齢児において、排泄の自立がやや遅くなっている

生活習慣や排泄の自立などの発達状況について、10年間で「できる」割合がやや減少している。特に10年間で5ポイント以上減少しているのは、排泄の自立に関する項目などであった。

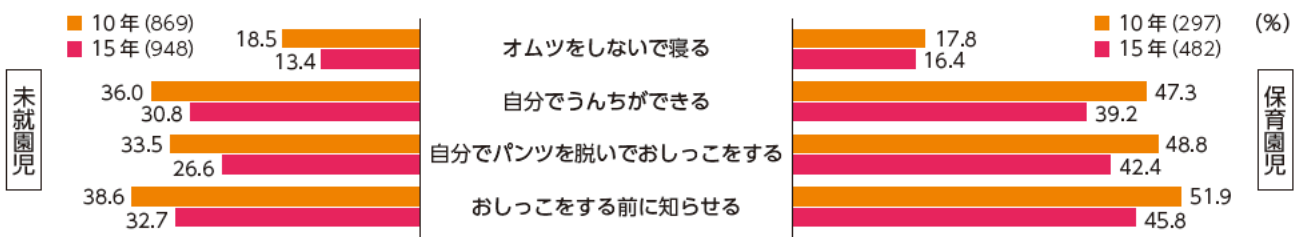
Q お子様は、次のことがひとりでできますか。

図1-5-1 ひとりでできること(経年比較)



※「できる」の%。

図1-5-2 ひとりでできること(就園状況別(低年齢)経年比較)



※「できる」の%。 ※12項目の中から、排泄に関連する4項目を図示。 ※低年齢は、1歳6か月～3歳11か月の幼児。

幼児の発達状況に関する12項目について、10年間で「できる」比率がやや減少している傾向がみられた(図1-5-1)。10年間で5ポイント以上減少したのは、排泄の自立に関連する項目「オムツをしないで寝る」、「自分でうんちができる」、「自分でパンツを脱いでおしっこをする」、「おしっこをする前に知らせる」と「家族やまわりの人にあいさつする」、「歯をみがいて、口をすすぐ」

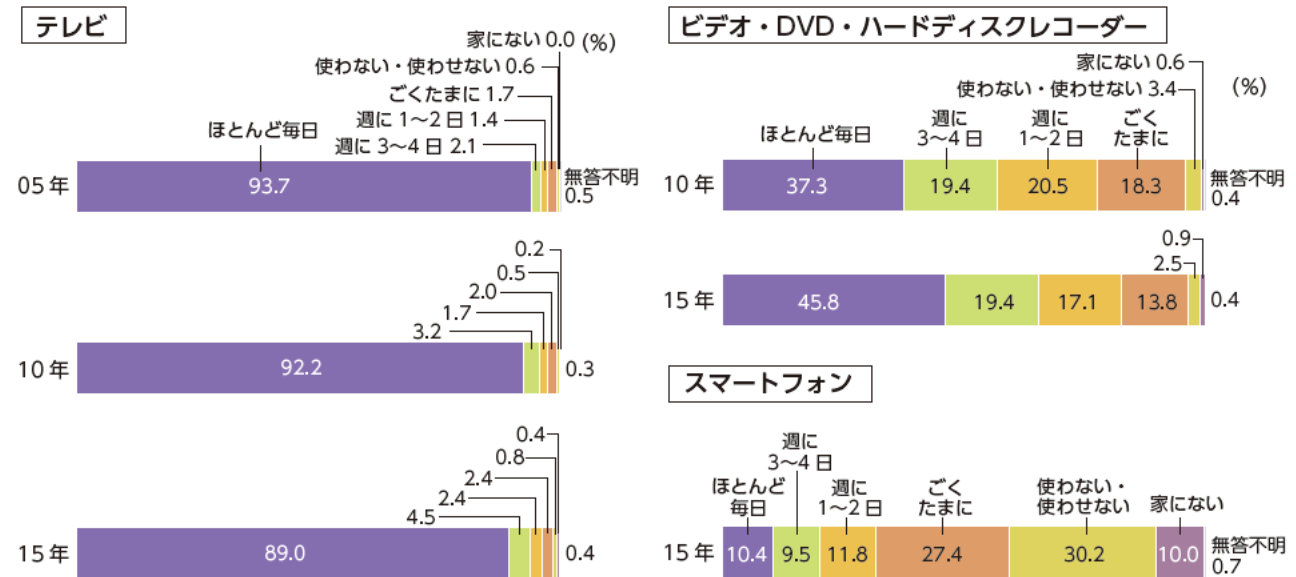
であった。排泄の自立について、高年齢児よりも経年での減少幅が大きかった低年齢児について就園状況別にみたところ、保育園児も未就園児も同様に、5年前より「できる」割合が減少していた(図1-5-2)。排泄の自立を急がせない風潮を背景に、保護者の意識や子どもへの関わりが変化していると考えられる。

スマートフォンを週1日以上使う比率は約3割

テレビの視聴頻度は減少。一方、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーは、「ほとんど毎日」視聴する比率が8.5ポイント増加した。

Q お子様は、次のものをどれくらい使いますか。

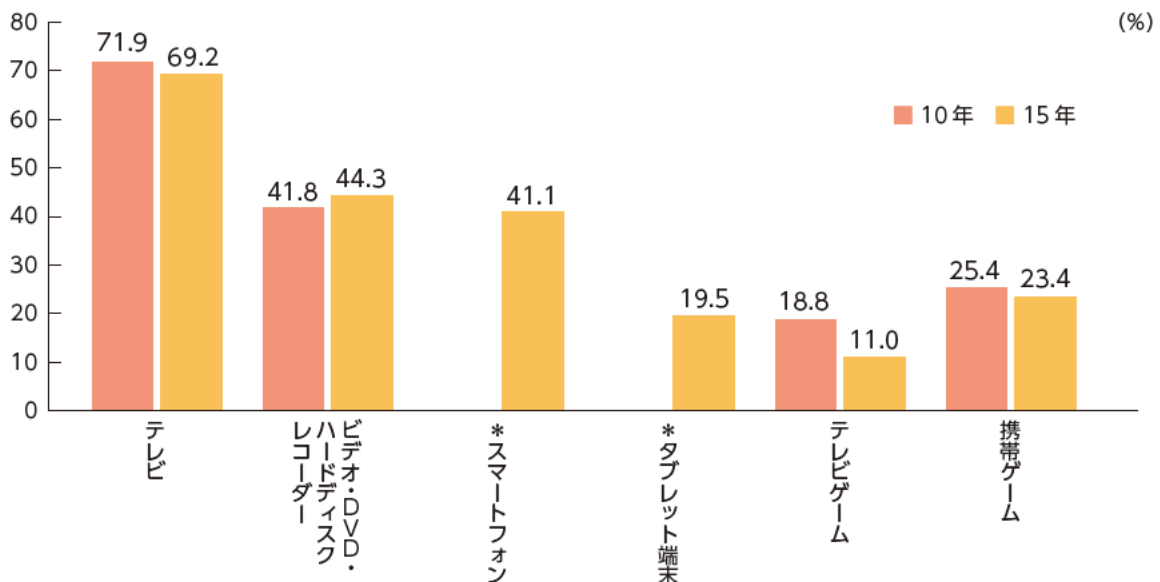
図1-6-1 メディアの視聴・使用頻度(経年比較)



※「ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー」は、10年調査、15年調査のみの項目。「スマートフォン」は15年調査のみの項目。

Q お子様は次のものを自分ひとりで操作できますか。

図1-6-2 電子メディアをひとりで操作できる比率(経年比較)



※複数回答。※「*」は、15年調査のみの項目。

テレビを「ほとんど毎日」見る比率は、10年間で4.7ポイント減少している(図1-6-1)。スマートフォンを「週1~2日」以上使う比率は約3割である。一方、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーの視聴頻度は、「ほとんど毎日」が8.5ポイント増加した。また、幼児

がひとりで操作できるメディアは、テレビが約7割、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーとスマートフォンは約4割を占めている。テレビゲームは5年間で7.8ポイント減少している。(図1-6-2)。



習い事をする比率は、6歳児で約8割に達する

習い事をしている比率は、5年前の10年調査と変わらなかった。子どもの年齢別では、3歳児まで低いが、4歳児以降に高くなっている。

Q お子様は現在、習い事・おけいこ事をしていますか(幼稚園・保育園で有料で習っているものや、塾・通信教育を含みます)。

1.

幼児の生活

図1-7-1 習い事をしている比率(経年比較)

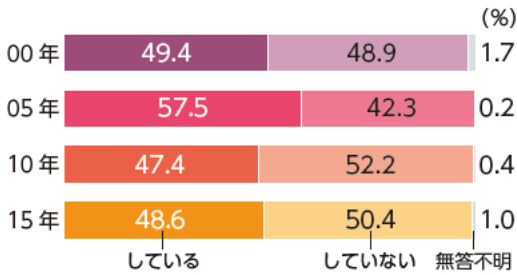
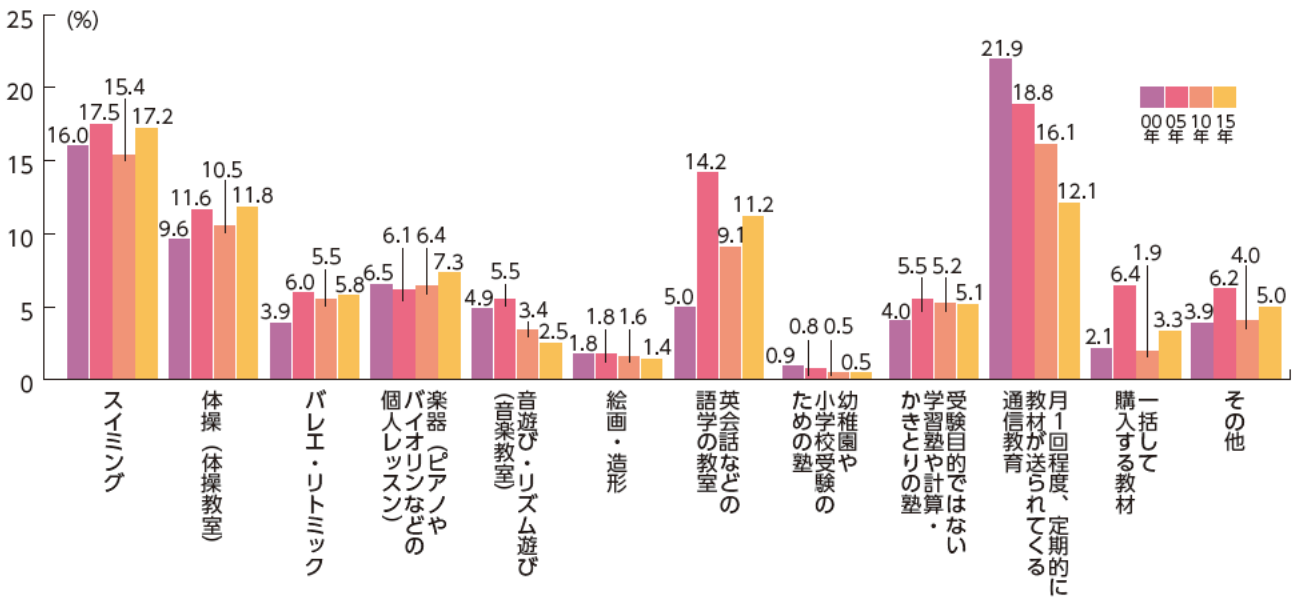


図1-7-2 習い事をしている比率(子どもの年齢別 経年比較)

	00年	05年	10年	15年
1歳児	23.3	25.1	17.1	17.0
2歳児	26.8	37.3	24.6	25.7
3歳児	42.0	50.9	37.7	29.8
4歳児	47.2	54.9	45.8	47.9
5歳児	68.6	75.1	67.6	71.4
6歳児	75.7	85.5	76.7	82.7

※「している」の%。
※1歳児は、1歳6か月以上のみを分析。

図1-7-3 習い事の種類(経年比較)



※複数回答。
※現在、習い事をしていないと回答した保護者を含めたすべての保護者の回答をサンプルとしている。
※10年調査以降は、「幼稚園・保育園で有料で習っているもの(保育時間中に習っているものは除きます)」と「幼稚園・保育園以外で習っているもの」の合計。
※10年調査で項目名を変更した。05年調査までは「スイミングスクール」→10年調査以降は「スイミング」、同様に「スポーツクラブ・体操教室」→「体操(体操教室)」、「絵画の教室」→「絵画・造形」、「幼児向けの音楽教室」→「音遊び・リズム遊び(音楽教室)」、「バレエ リトミック」→「バレエ リトミック」(集計は経年比較するために合算)。
※「サッカー」「ダンス」「武道・武術(空手・剣道・柔道など)」は図示を省略。

習い事やおけいこ事をしている比率は、15年調査では48.6%と半数を下回り、5年前と変わらない(図1-7-1)。年齢別に各年の調査結果をみると、15年調査は3歳児が29.8%ともっとも低いが、4歳児以降に高くな

り、6歳児は82.7%と、10年調査より6.0ポイント増加した(図1-7-2)。習い事の種類では、「スイミング」がもっとも高い比率であった。(図1-7-3)。



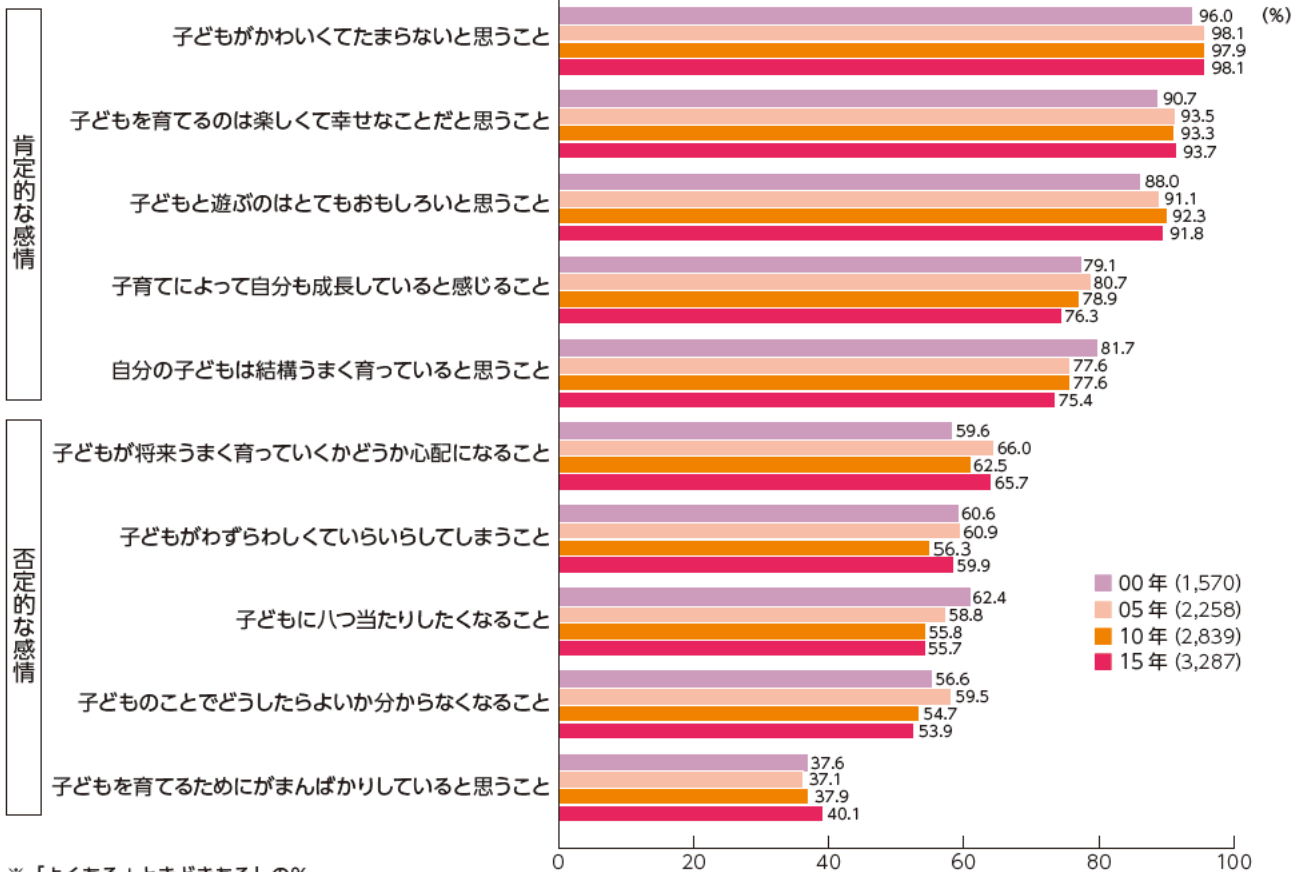
子育てへの肯定的な感情は、15年前からほぼ変わらず

約8～9割の母親が、子育てに対して肯定的な感情をもっていることは15年間で変わらない。子育てに対する否定的な感情や子どもの将来への心配は、専業主婦で5年間でやや増加している傾向がみられる。

Q あなたは最近、子育てについて次のようなことを感じることはありますか。

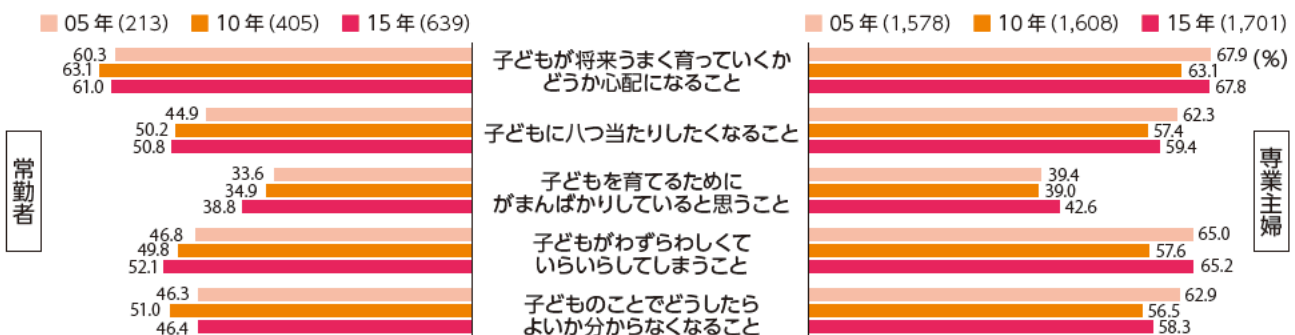


図2-1-1 母親の子育て意識(経年比較)



※「よくある+ときどきある」の%。
※ 母親の回答のみ分析。

図2-1-2 母親の子育て意識(母親の就業状況別 経年比較)



※「よくある+ときどきある」の%。
※ 母親の回答のみ分析。

多くの母親が子育てに対して肯定的な感情をもち、約4～6割の母親は不安感や否定的な感情をもつ傾向は15年前から変わらない(図2-1-1)。また常勤者よりも専業主婦のほうが、子育てに対する不安を抱えている傾向も変わっていない。専業主婦では5年前と

比べて、子育てへの不安感や否定的な感情を示す各項目に「よくある+ときどきある」と答えた比率はやや増加していた(図2-1-2)。母親の就業状況によって、子育て意識の変化に違いがみられるようである。

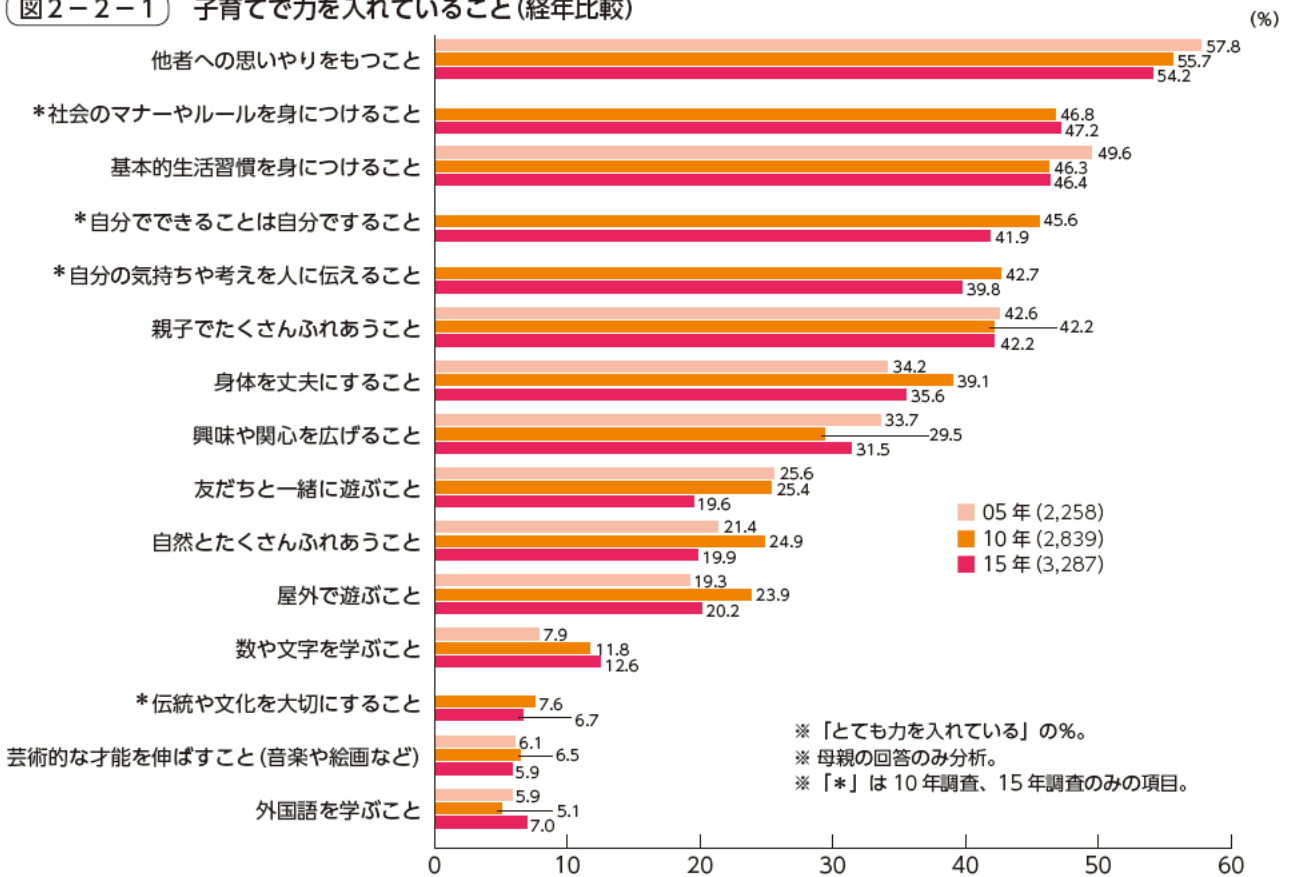
「友だちと一緒に遊ぶこと」に力を入れる割合が減少

子育てで、他者への思いやり、社会性や生活習慣に力を入れる割合が上位である傾向に変化はない。しかしこの5年間で「友だちと一緒に遊ぶこと」に「とても」力を入れる比率は5.8ポイント減少した。

Q あなたは、どのようなことに力を入れて、お子様を育てていますか。



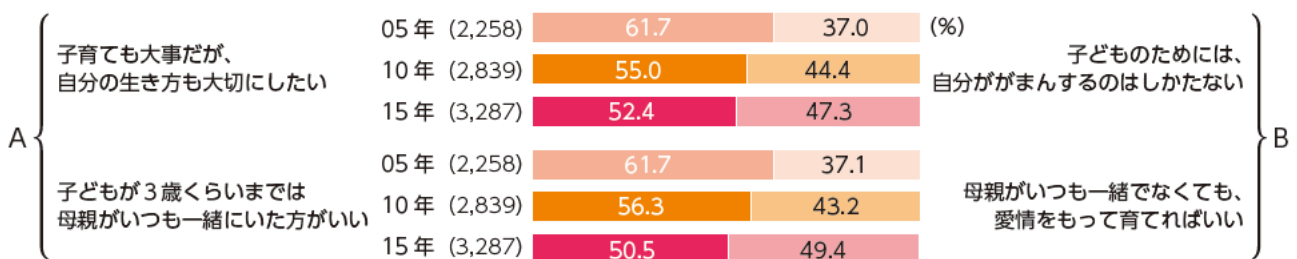
図2-2-1 子育てで力を入れていること(経年比較)



Q 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近い方はどちらですか。どちらかといえば近い方の意見に○をつけてください。



図2-2-2 母親の子育て観(経年比較)



※母親の回答のみ分析。
 ※無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。
 ※8項目の中から、10ポイント以上の変化があった2項目を図示(05年調査と15年調査を比較)。

多くの母親が、他者への思いやりや社会性、基本的な生活習慣に子育てで力を入れている傾向に変化は見られない(図2-2-1)。一方で、「友だちと一緒に遊ぶこと」に「とても」力を入れる比率は5年間で5.8ポイント減少した。また子育てに関する意見で10年間で増加した

のは「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」と「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればいい」であった(図2-2-2)。子育てに関する価値観が多様になってきている。

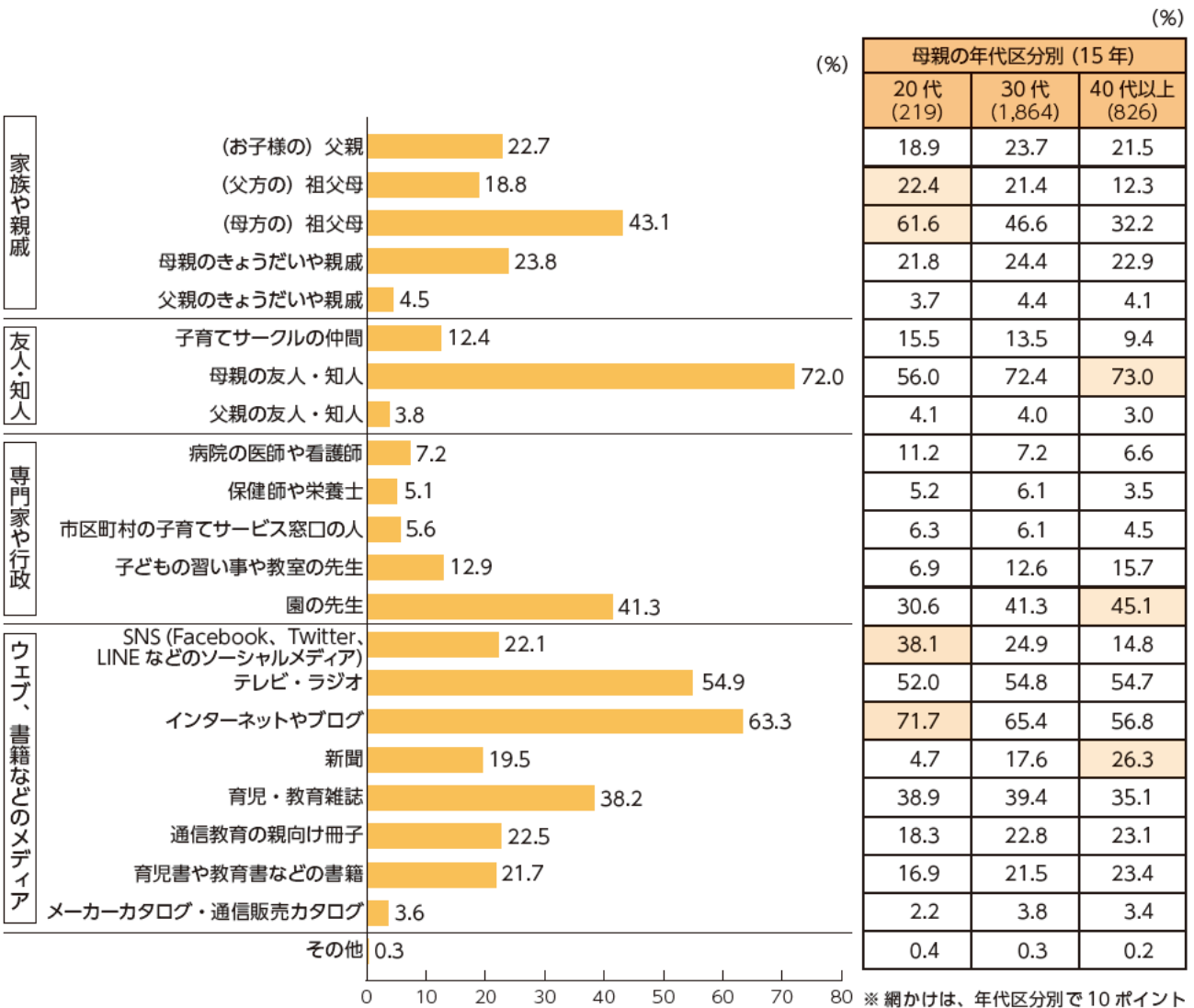
しつけや教育の情報源では、「母親の友人・知人」「インターネットやブログ」の比率が高い

しつけや教育の情報源として、多い順に「母親の友人・知人」、「インターネットやブログ」、「テレビ・ラジオ」、「(母方の)祖父母」、「園の先生」だった。人から得る情報とメディアを通じて得る情報の両方から入手している。20代の母親は40代以上の母親に比べて、「SNS」、「インターネットやブログ」から情報を得る比率が高かった。

Q 現在、あなたは「お子様のしつけや教育」についての情報をどこから(誰から)得ていますか。



図2-3-1 しつけや教育の情報源 (15年)



※ 複数回答。
 ※ 母親の回答のみ分析 (3,287)。そのため、「(お子様の) 母親」の項目を省略。

※ 網かけは、年代区分別で10ポイント以上の差がある項目の最大値。

しつけや教育の情報源として、多い順に「母親の友人・知人」が72.0%、「インターネットやブログ」が63.3%、「テレビ・ラジオ」が54.9%、「(母方の)祖父母」が43.1%、「園の先生」が41.3%だった(図2-3-1)。母親は、親族の「(母方の)祖父母」、友人・知人、専門家の「園の先生」、「インターネットやブログ」、「テレビ・

ラジオ」といったメディアを通じてなど、さまざまに情報を得ているようだ。20代の母親と40代以上の母親を比べると、20代の母親は「(父方・母方の)祖父母」、「SNS」、「インターネットやブログ」から、40代以上の母親は「母親の友人・知人」、「園の先生」から情報を得ることが多い傾向だった。

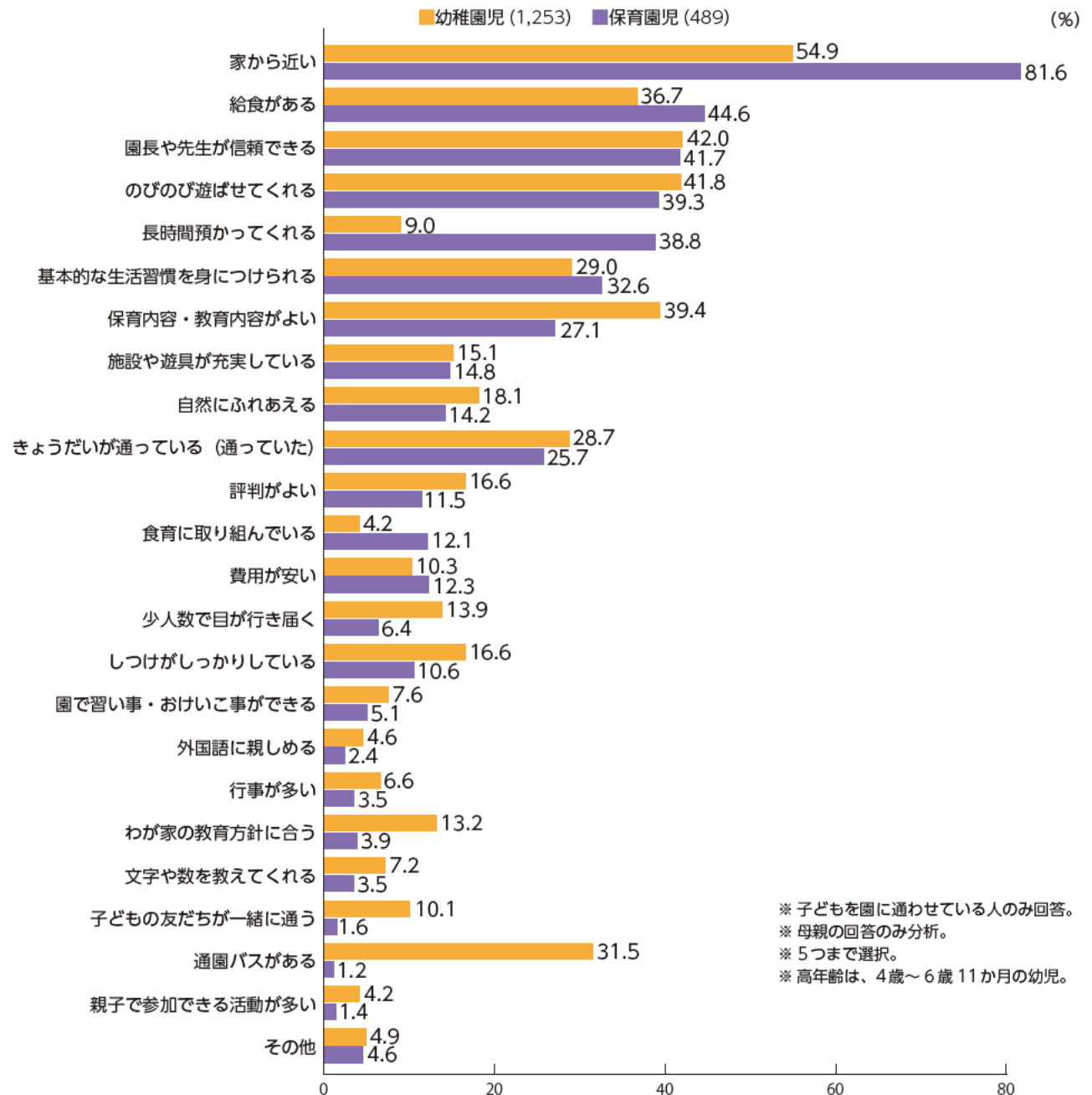
園選びは「家から近い」「給食がある」「園長や先生が信頼できる」などを重視

母親が幼稚園・保育園を選ぶ際に重視していることは、「家から近い」、「給食がある」、「園長や先生が信頼できる」、「のびのび遊ばせてくれる」が幼稚園、保育園ともに共通して上位にあがった。

Q 園を選ぶ際、どのような幼稚園や保育園にお子様を入れたいと思いましたか。



図2-4-1 園を選ぶポイント(就園状況別(高年齢)15年)



園を選ぶ際にどのような園に子どもを入れたいか、5つまで選択してもらった(図2-4-1)。選択率がもっとも高かったのは「家から近い」で、保育園児の母親は約8割、幼稚園児の母親は約半数が選択した。次に「給食がある」、「園長や先生が信頼できる」、「のびのび遊ばせてくれる」は、約4割の母親が選択した。また保育園児

の母親は幼稚園児の母親より、「家から近い」、「長時間預かってくれる」、「給食がある」、「食育に取り組んでいる」などを選択する比率が高く、幼稚園児の母親は保育園児の母親よりも「保育内容・教育内容がよい」、「通園バスがある」、「わが家の教育方針に合う」などを選択する比率が高かった。

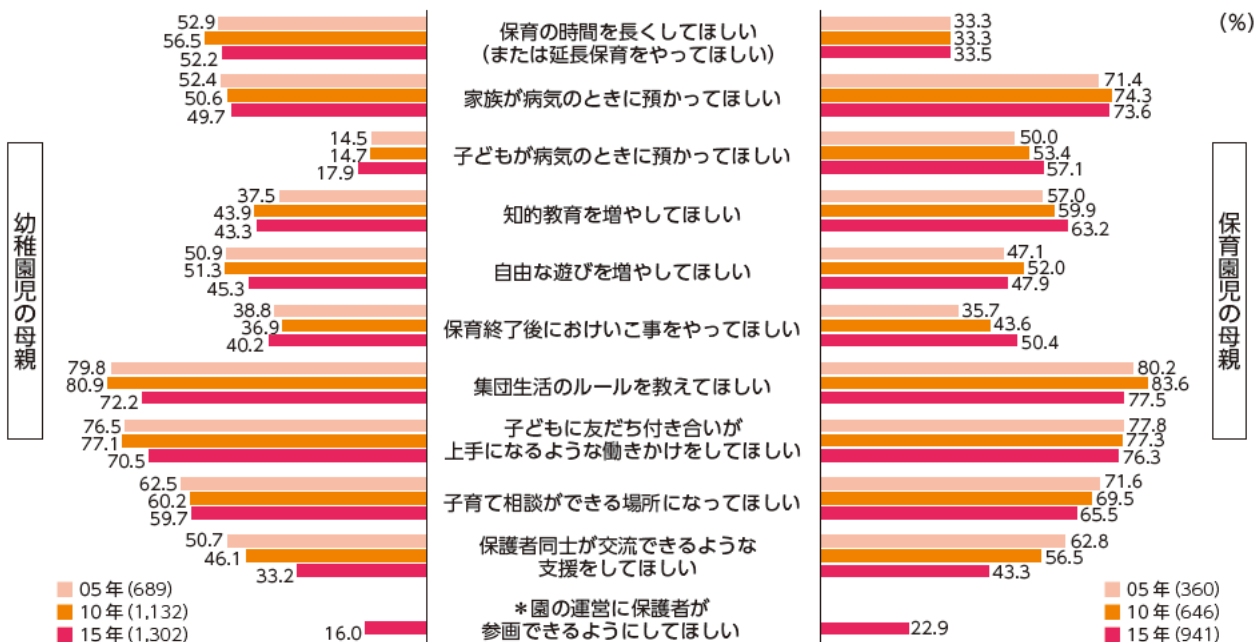
園への要望は、集団生活のルールに関する項目で減少傾向

幼稚園、保育園への要望は、「集団生活のルールを教えてほしい」、「保護者同士が交流できるように支援してほしい」が減少傾向にある。子どもに「四年制大学卒業まで」を期待する割合は73.4%となった。

Q 現在通っている幼稚園・保育園について、あなたは次のことをどう思いますか。



図2-5-1 幼稚園・保育園への要望(就園状況別 経年比較)

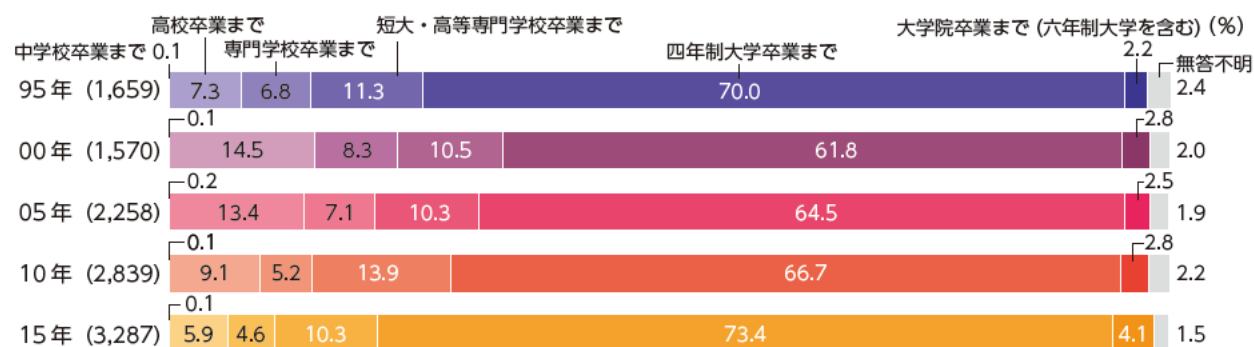


※「とてもそう思う+まあそう思う」の%。※子どもを園に通わせている人のみ回答。※母親の回答のみ分析。
 ※「*」は15年調査のみの項目。

Q 現在、お子様をどの程度まで進学させたいとお考えですか。



図2-5-2 子どもの進学に対する期待(経年比較)



※母親の回答のみ分析。
 ※95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」は「大学院卒業まで」とたずねた。

幼稚園、保育園への要望をたずねた(図2-5-1)。集団生活のルールや社会性に関する項目が上位になる傾向は変わらないが、幼稚園児の母親では10年間に5ポイント以上減少している。「保護者同士が交流できるように支援をしてほしい」は、幼稚園児・保育園児の母親と

もに10ポイント以上減少している。また子どもの進学に対する期待をたずねた項目では、「四年制大学卒業まで」を選択する比率は10年調査より増加して、73.4%となり、調査をとおしてもっとも高くなった(図2-5-2)。

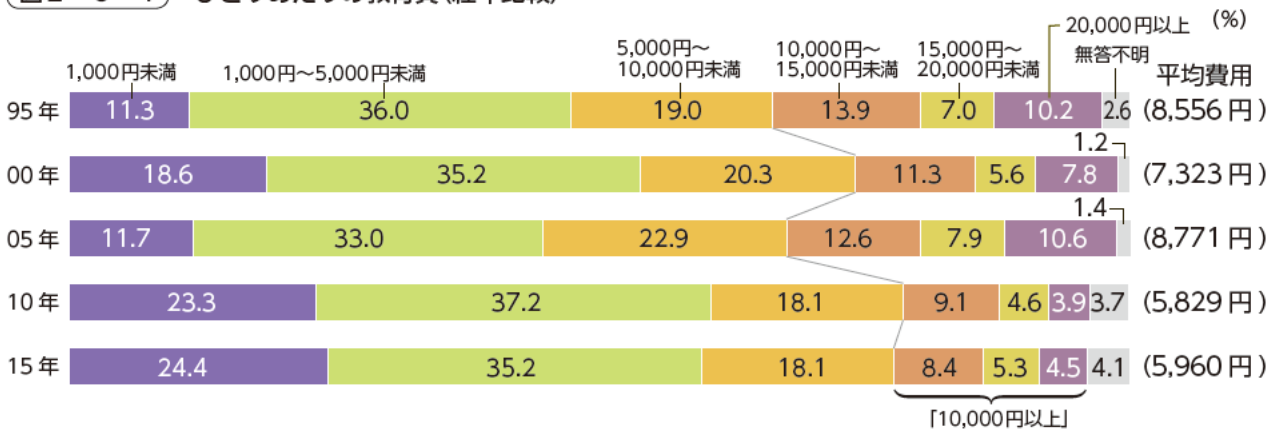
2. 母親の意識

この5年間で教育費に変化はみられないが、園にかかる費用は増加

教育費に10,000円以上支出している比率は、10年調査で17.6%、15年調査で18.2%とあまり変化はみられなかった。園にかかる費用は、30,000円以上支出している比率は、幼稚園で10年調査の49.9%から15年調査の57.9%、保育園で10年調査の23.3%から15年調査の29.1%と増加した。

Q 現在のお子様ひとりにかかる、1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具などにかかる費用はいくらですか(幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます)。

図2-6-1 ひとりあたりの教育費(経年比較)



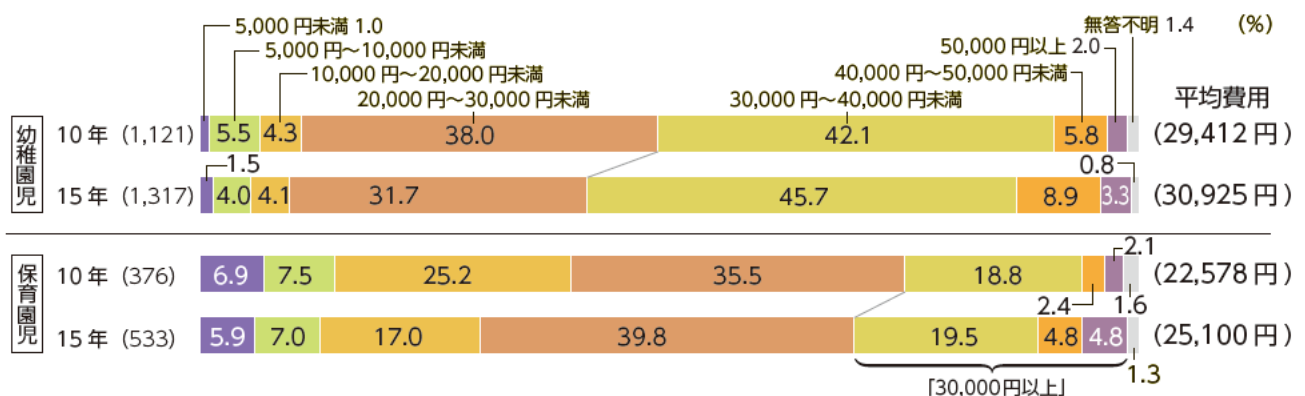
※ 平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円~5,000円未満」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。

※ 「20,000円~25,000円未満」「25,000円~30,000円未満」「30,000円以上」を「20,000円以上」としている。

※ 95年、00年、05年調査は「幼稚園・保育園にかかる費用(就園補助等も含めて)を除いた、1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具などにかかる費用を教えてください。」とたずねている。(ただし、95年は、質問文に「(就園補助等も含めて)」と「絵本・玩具」の部分は含まない)

Q 現在のお子様ひとりにかかる、1か月あたりの幼稚園・保育園にかかる費用はいくらですか。(保育料や、幼稚園・保育園で有料で習っている習い事の費用を含みます)。

図2-6-2 園にかかる費用(就園状況別(高年齢)経年比較)



※ 子どもを園に通わせている人のみ回答。

※ 高年齢は、4歳~6歳11か月の幼児。

※ 平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円~10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。

教育費に10,000円以上支出している比率は、05年調査の31.1%から10年調査の17.6%と減少し、15年調査でも18.2%とあまり変化はみられなかった(図2-6-1)。園にかかる費用は、30,000円以上支出し

ている比率をみると、幼稚園児で10年調査の49.9%から15年調査の57.9%と8.0ポイント増加し、保育園児で10年調査の23.3%から15年調査の29.1%と5.8ポイント増加した(図2-6-2)。



母親が家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる「父親」が増加、「近所の人」は減少

家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人が「いる」比率にあまり変化はみられなかった。一方、面倒を見てくれる人として「父親」をあげた比率は増加傾向にある。


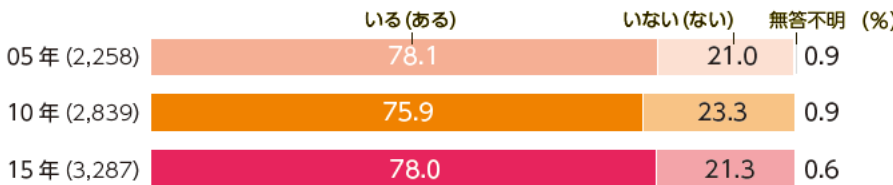
Q あなたが家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）がいます（あります）か。通常、幼稚園・保育園にお子様を通わせている時間は除いてお答えください。  母親のみ
の回答

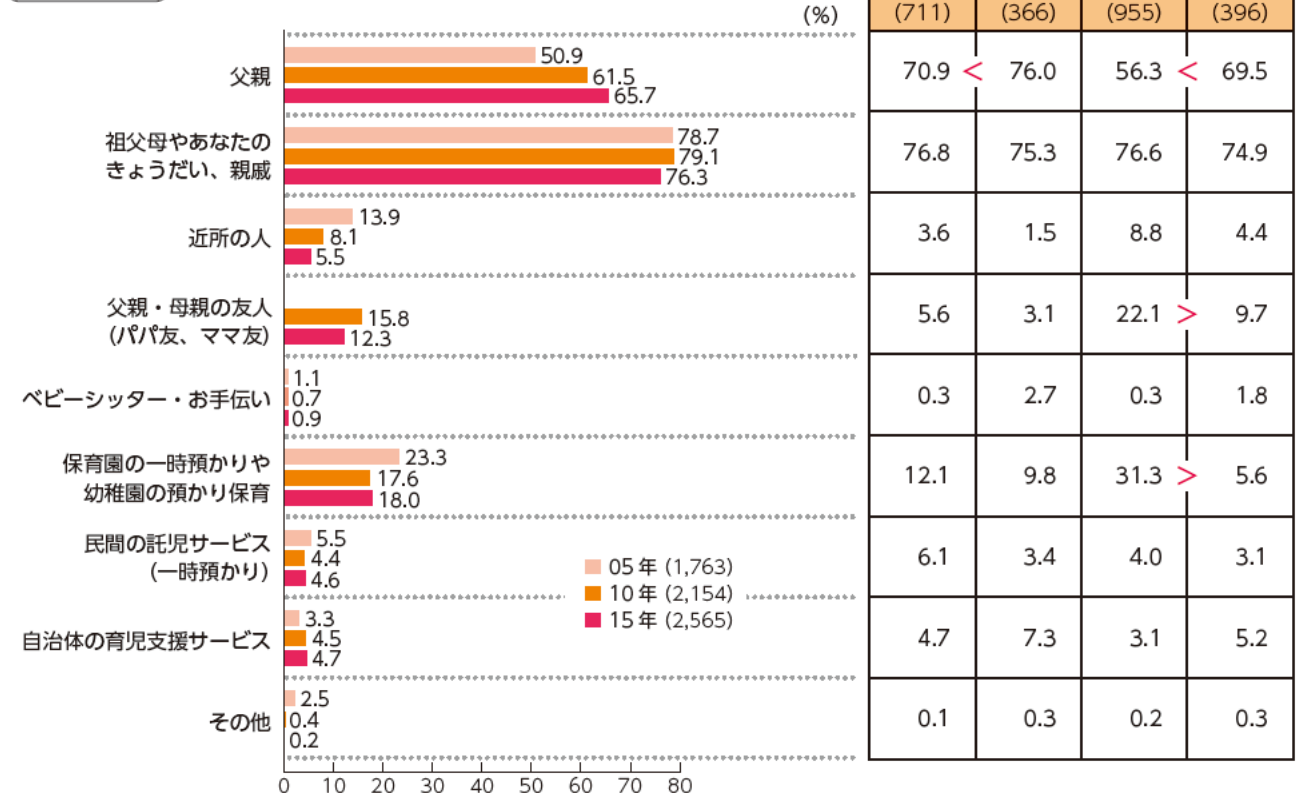
図3-1-1 子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）の有無（経年比較）



※母親のみ回答。
※05年調査は、「あなたが仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）はいます（あります）か」とたずねている。

Q 面倒を見てくれる人（機関・サービス）を教えてください。  母親のみ
の回答

図3-1-2 面倒を見てくれる人（機関・サービス）（経年比較）



※複数回答。※ 母親のみ回答。子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）が「いる（ある）」と回答した人のみ回答。

※ 「父親・母親の友人（パパ友、ママ友）」は、10年調査以降の項目。

※ 表内の<>は年齢区分別・就園状況別にみたときに、5ポイント以上の差が見られた項目。

※ 低年齢は、1歳6か月～3歳11か月の幼児。高年齢は、4歳～6歳11か月の幼児。

※ 10年調査までは「祖父母や親戚」→15年調査は「祖父母やあなたのきょうだい、親戚」と項目名を変更した。

家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人が「いる（ある）」と回答した母親は15年調査では78.0%で、調査をとおしてほぼ変わらなかった（図3-1-1）。面倒を見てくれる人として「父親」をあげた比率は、05年調査が50.9%、10年調査が61.5%、15年調査が65.7%と増加し、「近所の人」、「父親・母親の友人（パパ友、ママ友）」が減少傾向である。年齢区分別・就園

状況別にみると、低年齢児では「父親」、「祖父母やあなたのきょうだい、親戚」が7割以上と比率が高い（図3-1-2）。高年齢児では「父親」の比率が下がり、幼稚園に通う場合、「保育園の一時預かりや幼稚園の預かりサービス」が31.3%、「父親・母親の友人（パパ友、ママ友）」が22.1%と高くなる傾向がみられた。

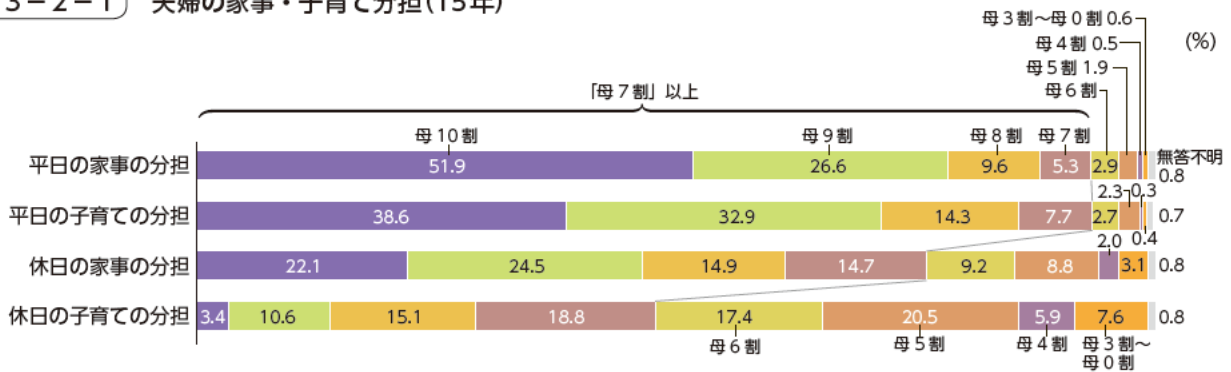
母親の93.5%が、平日の子育てについて、自分が7割以上分担していると回答

平日と休日の家事と子育てについて、母親が7割以上分担していると回答した比率は「平日の子育て」で93.5%だった。母親の就業状況別にみると、母親が常勤者であるほうが、パートタイムや専業主婦よりも父親が家事と子育てを行う比率が高い傾向がみられた。

Q あなたと父親の、子育て・家事の分担の割合は、どれくらいだと思いますか。



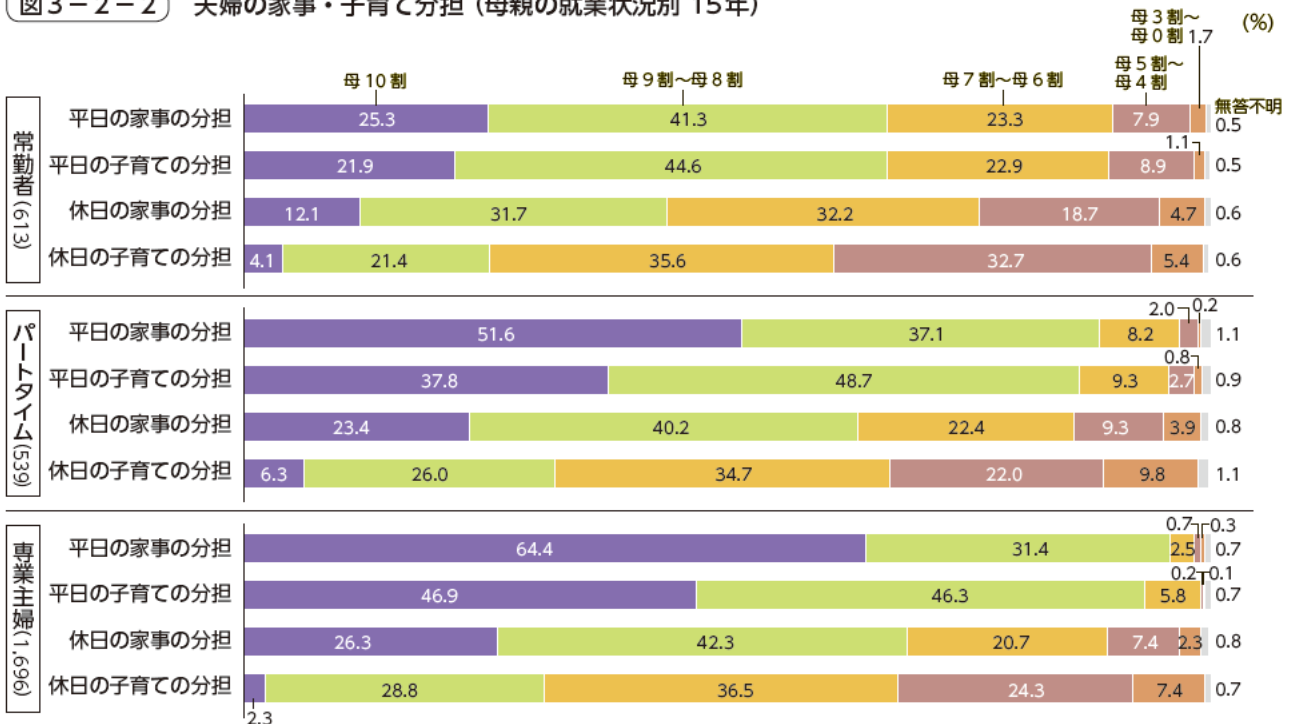
図3-2-1 夫婦の家事・子育て分担(15年)



※配偶者がいる母親のみ回答 (3,228)。

※「母10割父0割」を「母10割」、「母9割父1割」を「母9割」、「母0割父10割」を「母0割」のように図示している。

図3-2-2 夫婦の家事・子育て分担(母親の就業状況別 15年)



※配偶者がいる母親のみ回答。

※「母10割父0割」を「母10割」、「母9割父1割」を「母9割」、「母0割父10割」を「母0割」のように図示している。

平日と休日の家事と子育てについて、夫婦の分担の割合を母親にたずねた(図3-2-1)。母親が7割以上分担していると回答した比率は、「平日の家事」は93.4%、「平日の子育て」は93.5%、「休日の家事」は76.2%、「休日の子育て」は47.9%だった。とくに平日の家事と子育てを母親が多く担っており、父親は休日に

家事を行ったり、子どもと接したりしている様子が見える。母親の就業状況別にみると、母親が常勤者であるほうが、パートタイムや専業主婦よりも父親が家事と子育てを行う比率が高い傾向がみられ、とくに平日の家事・子育てに差がみられた(図3-2-2)。

本調査からわかる 20 年間の変化

無藤 隆 (白梅学園大学)

20年間の幼児の生活のあり方は日本社会の全体の変容を受けて、変わってきた。一つは少子化の進行である。友達との遊びが減ってきた、など、子ども同士の関係が成り立ちにくくなり、その分、幼稚園・保育園の果たす役割が大きくなってきている。そこでこそ、多くの子どもが集まるからである。第二に、共働き家庭が増えており、保育園に子どもを預ける世帯が多くなっている。それに伴い、父親の子育てへの関与も増えているが、それは特に週末の土日に多い。長時間の保育が増えるにつれて、幼稚園・保育所への要望も増えていき、知的な教育も要望が増している。なお、典型的な専業主婦家庭も減りつつはあるものの、かなりの割合で存在する。いずれの家庭であっても特に平日の子どもの世話や子どもと一緒に過ごすのは主に母親である。第三に、経済格差の拡大が見られる。教育費が全体として減少しているが、それが絶対額として少ない家庭とそれなりの額を維持できる家庭とで、子どもに費やす習い事その他の違いが大きくなる。教育費が少ないことが子どもの将来に対して不利になるかどうかはこの調査だけでは分からないが、その検討を進める必要があることは明かだ。第四に、価値観は多様化している。子育て観などもどれもが主な考えというより、対立する考えの双方がかなりの割合を占めている。いずれにせよ、育児への満足度はかなり高い。相談相手も若い世代ほど、ネットでの情報に頼る率が高くなる。

遊びの中で、遊びを通して豊かさや充実感を学ぶ子どもたちの世界を

佐藤 暁子 (東京家政大学准教授)

幼児の生活アンケート調査も1995年から20年、5回目を迎え、最初の調査を受けた子どもたちが保護者の立場になる時期となった。2014年の合計特殊出生率は1.42となり、本調査の回答者である幼児の父母の平均年齢も38.5歳〜36.5歳と20年前より3歳近くあがっている。これは母親の最終学歴や就業意識、就業状況(産休・育休期間、保育受け入れ年齢、保育時間、保育経費)などとの関係が深く考えられる。そして、母親の就労に伴い、子どもたちの生活も様々な面で変化してきている。

○早寝早起きの傾向が強まり、保育園や幼稚園、認定こども園で過ごす時間が長くなっている→預かり保育や延長保育、勤務時間の多様化などの影響が考えられる。

○幼児の発達や排泄、生活習慣の自立が遅くなってきている→母親の意識の変化

○平日一緒に遊ぶ相手は、母親が増加して友だちが減少→少子化、就労時間などの関係で、降園後に友だちと遊ぶ時間や場所が取れない。

子ども時代の「遊びの中で、遊びを通して豊かさや充実感を学ぶ体験」は大切である。「子どもの最善の幸福」のために、今後いっそうの子どもたちの成長発達を真ん中に考えた子育て支援制度の改善が重要であると思われる。

子ども同士が育ち合う機会はどう変化しているか 荒牧 美佐子 (目白大学専任講師)

この20年間で、最も変化が見られたのは「平日、誰と一緒に遊んでいるか」という項目であり、「母親」という回答は30ポイントも増加、今回の調査では86%にまで達した。一方で、「友だち」は徐々に減少し、今回はわずか27.3%にとどまっている。これらの背景には、園での滞在時間が長くなるに伴い、園以外で子ども同士がかかわる機会が減っていることだけでなく、親の子育て意識の変化もあって考えられる。例えば、「友だちと一緒に遊ぶこと」に力を入れている親の割合は徐々に減少傾向にある。

しかし、今回の調査でも「他者への思いやりをもつ」や「社会のマナーやルールを身につける」などは重視されており、また、やや減少傾向にあるが、園に対して社会性を学ぶような働きかけを期待する親は7割以上を占める。つまり、子どもの社会的スキル獲得に対する親の関心は変わらず高いが、そのために親が自ら積極的に子ども同士が遊ぶ機会を用意するよりも、園での活動に依存する傾向が強まっていると考えられる。

確かに園での友だちや保育者とかかわりを通して、子どもが学ぶことはたくさんあるだろう。しかし、園と家庭での経験だけで十分と言えるだろうか。例えば、ごく小規模の園では、何年間も顔見知りのメンバーとのみ、かかわり続けることとなる。地域との関係が希薄化していく中で、子どもが他者とかかわりから学ぶ機会が減っているのではないか、そのあたりについても今後慎重に検討していく必要があるだろう。

調査企画・分析メンバー

無藤 隆	(白梅学園大学教授)
佐藤 暁子	(東京家政大学准教授)
荒牧 美佐子	(目白大学専任講師)
高岡 純子	(ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室長)
真田 美恵子	(ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)
田村 徳子	(ベネッセ教育総合研究所 研究員)
朝永 昌孝	(ベネッセ教育総合研究所 研究員)

※肩書き・所属は、刊行時点のものです。

引用・転載については下記にてご確認ください。

<http://berd.benesse.jp/application/>

本調査の速報版は、
ベネッセ教育総合研究所のホームページからダウンロードできます

ベネッセ教育総合研究所が実施している各種調査の結果も、こちらからご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所

検索

<http://berd.benesse.jp/>

本調査の詳細な分析をまとめた『第5回 幼児の生活アンケートレポート』を、2016年に刊行する予定です。

「第5回 幼児の生活アンケート」速報版

発行日：2015年11月25日

発行人：谷山 和成

編集人：木村 治生

発行所：(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

企画・制作：ベネッセ教育総合研究所

〒206-0033 東京都多摩市落合1-34

デザイン：(株)ジー・アンド・ピー

5TT002

© Benesse Educational Research and Development Institute

※無断転載を禁じます。